

千葉県八千代市

麦丸台第2塚群発掘調査報告書

-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

2019

日新ホーム株式会社
八千代市教育委員会
株式会社地域文化財研究所

千葉県八千代市

麦丸台第2塚群発掘調査報告書

-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

2019

日新ホーム株式会社
八千代市教育委員会
株式会社地域文化財研究所

例 言

1. 本書は、宅地造成に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施された、麦丸台第2塚群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、日新ホーム株式会社より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が八千代市教育委員会の指導の下に行なった。
3. 遺跡の所在地及び、面積、調査期間、調査体制は下記の通りである。

所 在 地 千葉県八千代市大和田新田字麦丸台 668 番
面 積 527m²
調 査 期 間 令和元（2019）年 7 月 8 日～同年 7 月 19 日
調査担当者 高野浩之
調査参加者 今野秀樹 表 豊 川村理華 木村春代 田中成光 野村浩史
古里兼吉 横 勝雄 増田香理 深山恒夫

4. 整理作業及び本書の作成は、株式会社地域文化財研究所において高野が担当した。
5. 扱筆分担は、第1章第1節が森竜哉（八千代市教育委員会）、第1章第2～4節・第2～4章が高野である。繩文土器については斎藤弘道氏にご教示いただいた。
6. 調査記録及び出土品は、一括して八千代市教育委員会が保管・管理している。
7. 調査においては下記の方々にご指導、ご協力を賜った（順不同・敬称略）

日新ホーム株式会社 株式会社 E・S・G 千葉県教育庁教育振興部文化財課
八千代市教育委員会文化・スポーツ課文化財班 堀江卓也 斎藤弘道

凡 例

1. 遺構図は、国家標準直角座標IX系（世界測地系）を基準に作成し、方位は座標北を示す。
2. 遺跡名の略号は「293」である。
3. 使用した地図類は、第3図が1/20,000「明治15年測量 白井橋本村」を、第4図が国土地理院発行1/50,000地形図「佐倉」を、第5図が1/2,500「八千代市都市図」を使用し、加筆した。
4. 遺構の形状及び規模は、現況から判断・計測した。主軸方向は、長軸線を軸線として座標北に対し東西に何度傾いているかを示している。また、挿図中等高線の単位は「m」である。
5. 遺構図における土層説明で「φ」は粒の径を表し、規模をミリ単位とした。微・少・中・多量は土層内における含有物の量を4区分したものであり、微量は2%以下、少量は3～9%、中量は10～19%程度、多量は20%以上で含有量を（ ）に示した。
6. 土層の色調は『新版標準土色帖 2003年版（財團法人日本色彩研究所ほか）』を参考にした。
7. 遺物番号は本文、挿図、写真図版共に一致している。
8. 出土遺物で、接合されたものは1点と数えているが、同一個体であることが明らかであっても接合が適わなかったものは、各破片を1点としている。
9. 遺構図中に用いた網掛けの内容は図中に示した。
10. 参考・引用文献は、本文中の最後に一括して掲載した。

目 次

本文目次

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査経過と遺跡の立地環境

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査方法と調査経過	1
第3節 基本層序	2
第4節 遺跡の位置と環境	3

第2章 調査の成果

第1節 調査の概要	7
第2節 検出された遺構と遺物	9

第3章 まとめ

写真図版

報告書抄録

挿 図・表 目 次

第1図 確認調査トレーニング配置図	1	第6図 調査区全体図	7
第2図 基本層序	2	第7図 第1号塚	8
第3図 周辺旧地形図	4	第8図 第2号塚	10
第4図 周辺遺跡分布図	5	第9図 塚除去後調査区	11
第5図 調査区域図	6	第10図 遺構外出土遺物	12

第1表 出土遺物観察表

写 真 図 版 目 次

図版 1 第1・2号塚現況 / 調査区全景

図版 2 第1号塚現況 / 第1号塚西側土層断面 / 第1号塚東側土層断面 / 第1号塚南側土層断面 / 第1号塚北側土層断面

図版 3 第2号塚現況 / 第2号塚西側土層断面 / 第2号塚東側土層断面 / 第2号塚南側土層断面 / 第2号塚北側土層断面

図版 4 遺構外出土遺物

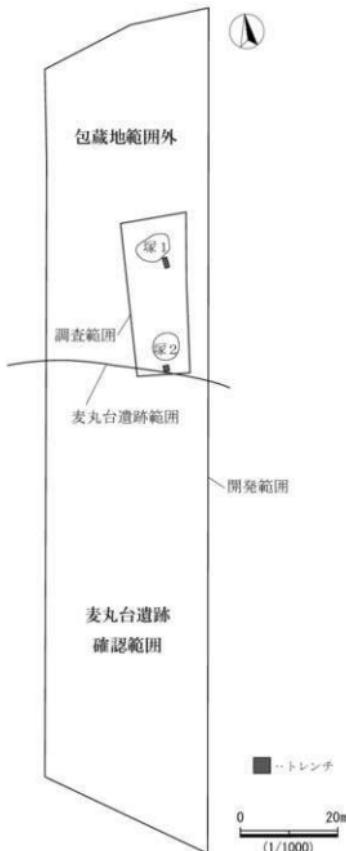
第1章 調査経過と遺跡の立地環境

第1節 調査に至る経緯

平成31年2月8日、日新ホーム株式会社代表取締役 岡田定一氏（以下、事業者）から「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の文書が八千代市教育委員会（以下、市教委）に提出された。市教委において現地踏査を行い、開発面積523292m²の内、3100m²が周知の埋蔵文化財包蔵地（麦丸台遺跡）に含まれると判断し、同年2月12日、その旨を事業者に回答した。回答後、事業者と協議を行い、遺構・遺物等の状況を把握するための確認調査を実施することとなった。同年3月4日、事業者から文化財保護法第93条の届出が提出され、市教委では準備が整った平成31年4月23日に確認調査を開始した。調査は、令和元年5月15日まで行った。結果は、若干の縄文土器の出土のみで、遺構は検出されなかった。しかしながら、山林伐採後
の開発予定地内には、未登録の遺跡として、塚
2基が新たに発見された。千葉県教育委員会に
その旨報告し、「麦丸台第2塚群」と命名し登
録の手続きを行った。その後、塚2基の取扱い
について市教委と事業者において協議が行わ
れ、記録保存（発掘調査）の措置をとることと
なった。調査の実施については、民間調査機関
による実施が合意され、市教委は民間調査機関
各社から調査計画書・積算書の提出を求めた。
その後、事業者との協議を重ね、適正な調査実
施が可能と判断した調査機関から、株式会社地
域文化財研究所が選定された。令和元年6月6
日、事業者、株式会社地域文化財研究所、市教
委との間で発掘調査の実施に関する協定書を締
結し、翌6月7日、株式会社地域文化財研究所
から市教委に文化財保護法第92条の届出が提
出され、本調査実施に至った。

第2節 調査方法と調査経過

発掘調査は塚2基を対象とし、周囲に塚を包
括した調査区を設定した。7月1日から、調査
を開始する前の発掘器材及び休憩施設搬入、基
準点・水準点の測量、調査区の下草刈りと調査
前現況の写真撮影、現況測量等の準備作業を
進めた。基準点測量はx = -28660, y = 23780
の交点を基点とし、調査区に10 m × 10 mの方
眼を網羅した。グリッド名は基点から東へA～



第1図 確認調査トレンチ配置図

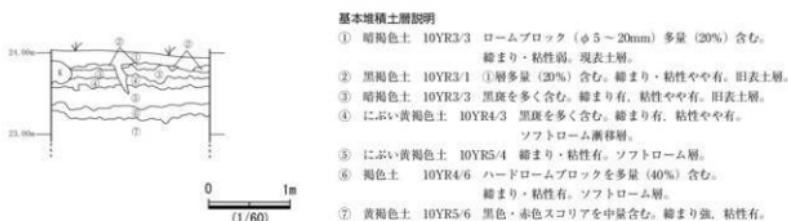
C、南へ1～4の記号を当て、交差する地点にA1～C4の名称を付して遺構の位置や遺物採集などの基準に用いた。写真撮影は35mm判カラーリバーサルフィルム機とデジタルカメラ機（RAWデータ及びJPEG形式）を併用した。現況測量は、10cm間隔の標高点測量を実施し、塚は1/40縮尺で、塚以外の調査区は1/80縮尺で記録した。

調査は7月8日からバックホウによる表土除去を開始した。翌9日には表土除去を継続するとともに、作業員を投入し、調査区北側の第1号塚の土層確認作業に着手した。土層観察は、塚頂部を基点とした十字の土層観察用セクションベルトを設定し、南面と東面から観察することとした。併せて基本層序の観察を行い、写真撮影と実測1/10縮尺で記録した。10日、第1号塚の土層断面を精査し、写真撮影を行った。また同日に表土除去を完了した。この段階で、塚封土下以外から遺構は確認されていない。11日、第1号塚の土層断面実測を1/20縮尺で行い、併行して第2号塚の土層断面確認作業を開始した。16日には第1号塚のベルトを除去すると同時に第2号塚の土層断面実測を1/20縮尺で行った。17日、第2号塚のセクションベルトを除去し、塚の調査を終えた。18・19日で塚封土除去後の遺構確認作業を行った。遺構は検出されなかったため、調査区全体の写真撮影と全体図の作成を実施し、発掘調査を終了した。

整理作業は、現地での現況測量を終了後、速やかに平面図のトレースに入った。デジタルトレースにより、調査区全体の現況と各塚のトレースを併行して進めた。出土遺物は、水洗いして乾燥させた後、手書きによる注記作業と接合作業を連続して行った。遺物は種類別に分類し、掲載遺物を抽出後に原寸大で実測を行った。掲載遺物のトレースはロットリングを使用し、一方で写真是デジタルカメラで撮影した。編集はDTPソフトを用いて割付作業を行い、印刷所へ入稿後に校正を重ねて報告書の刊行に至った。

第3節 基本層序

基本層序は、調査区のほぼ中央にあたるA2グリッド地点の西壁部分で観察を行った。①層は現表土で、全体に10～15cm程度の層厚である。縮りが弱く、笠竹等の繁殖が著しい。②層は①層が混在する層で、調査区の一部でのみ認められる。縄文土器（第10図・10）が出土し、遺物を包含した層である。③層は黒斑が認められる層で、旧表土とみられる。④層はソフトロームの漸移層で、上面が遺構検出面である。現地表面から遺構検出面までの厚さは25～35cm程度になる。⑤・⑥層はソフトローム層で、⑥層にはハードロームがブロック状に含まれる。⑦層以下はハードローム層で、スコリアが含まれるようになる。



第2図 基本層序

第4節 遺跡の位置と環境

麦丸台第2塚群の所在する八千代市は、千葉県北半を占地する下総台地の西部に位置している。市域は、かつて印旛沼に注ぎ、現在では花見川から東京湾へと続く新川が南流しており、その支流となる桑納川が東西を横切ることによって台地が三方に分断された形となっている。これらの台地はさらに開析され、小支谷が樹枝状に入り込み、複雑な地形を呈している。本地点周辺においても南東側に須久茂谷津、北西側に花輪谷津が深く浸食することによって、半島状の台地が形成されていることが看取される。下総台地の標高は20m～30m程度の平坦地が形成されているが、その中にあって、東京湾水系と印旛沼水系の分水嶺とされる地点が千葉市横戸付近から習志野付近にかけての地域である。標高は28～30mで、そこから徐々に高度を下げていくことが知られているが、北東側にあたる本地点付近は、標高約24m前後を測る場所に立地している。

八千代市域は、前述したように台地の大部分が平坦な地形であったことから、土地利用に適していたことがうかがえ、これまでに旧石器時代から近世にいたるまで多数の遺跡が周知されてきた。本地点で調査の対象となった時期が中・近世で、調査される遺構が「塚」であることから、ここでは同様の時期・遺構の所在する遺跡に絞り、発掘調査が行われた事例を中心に注目してみたい。

八千代市にある遺跡を概観すると、中・近世の遺跡は城館跡と塚群が主体となり、塚だけを見るとほとんどは近世の所産と考えられている。2011年当時、塚は約200基の存在が確認されているが、その内、開発などに伴い発掘調査が実施されているのは34基で、調査されないまま消滅したものも多數あるとみられている（常松 2011a）。

本地点から花輪谷津を挟んだ西方に尾崎群集塚（6）が所在する。塚群は6基で構成されており、その中で第01号塚の調査が実施されている。塚は一辺14m、高さ2.9mの方形塚で、基底部から焼土が検出されたことから、構築する際に宗教的な何らかの行為が伴った可能性を示唆されている。

東方に目を転じると金塚所在塚（3）が構築されている。測量により径10.8m、高さ1.0mの円形の塚と判断され、主体部は確認されていないが、塚を半周する溝状遺構が検出されている。

北方の桑納川を挟んだ対岸では追分遺跡の範囲内に所在する追分塚（33）の調査が行われている。当初は古墳とされていたが、主体部や周溝が検出されないことから一辺21.5m、高さ2.5mの方形塚ということが判明した。封土内から出土した寛永通宝から、築造年代は17世紀半ばから19世紀初め頃とされている。こちらでも封土下の旧表土上面から、部分的に焼土の混入が認められている。

新川を挟んだ対岸の境堀遺跡・向境遺跡（44）内では5基の塚が所在している。いずれも隅丸方形を呈した塚で、埋納施設は確認されず、中世以降の塚と判断された。規模は一辺10.5m、高さ1.5～2.4mの2・3号塚、一辺6～7m、高さ1.2mの4号塚、一辺5m前後で高さ1m以内の1・5号塚で1・5号塚は境堀遺跡側の台地縁辺に構築され、3・4号塚では周溝が確認されている。

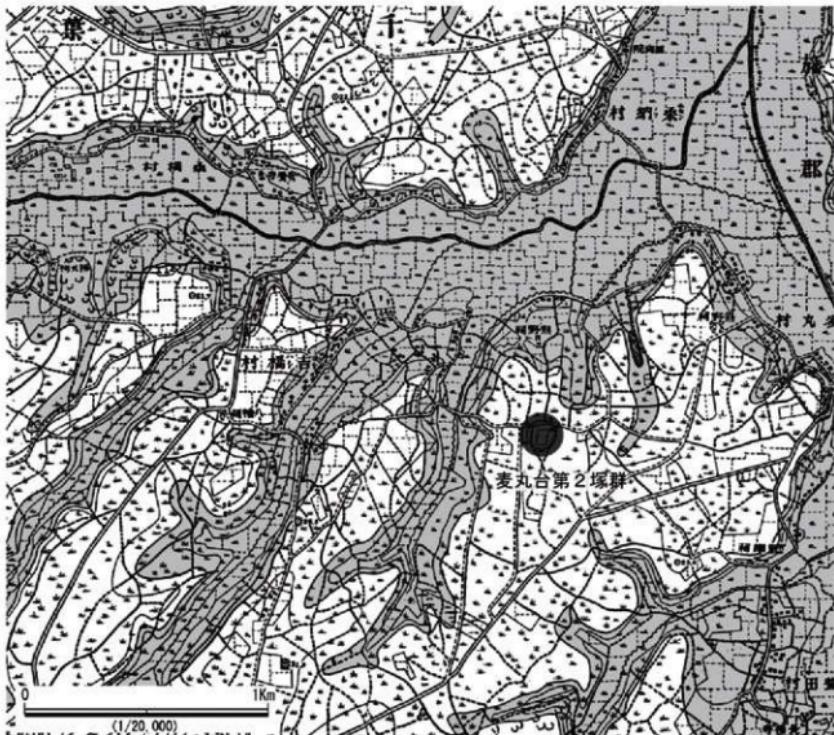
境堀・向境両遺跡に隣接する栗谷遺跡（45）内には栗谷塚と称された円形の塚が調査された。規模は径が10m前後、高さ2.6mで旧表土を削平して整地した後に封土が積み上げられている。周溝は確認されていないが、封土下から地山を掘り込んだ状態で主体部とみられる土坑が検出されている。

新川左岸の村上地区に所在する村上塚群は古墳を含む22基で構成されており、第1塚群（18）が14基、第2塚群（19）が8基である。村上第2塚群の南側に所在する村上供養塚は、一辺16m、高さ3.8mを有する方形の塚で、塚頂部直下3.8mの封土内から常滑産と在地産の壺が並列し、脇には素焼きの小皿が出土している。常滑産の壺には銅錢91枚（寛永通宝86枚と景祐元宝、元祐通宝、至

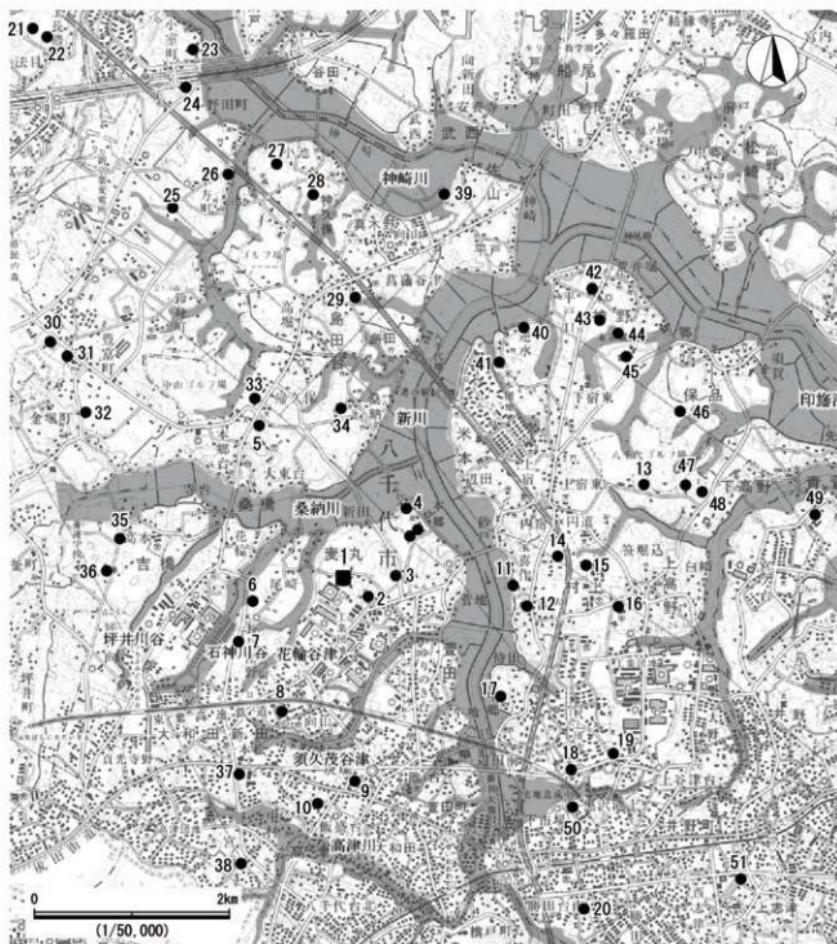
和元宝、聖宋元宝、洪武通宝)が埋納されていた。寛永通宝は全て「古寛永」で、鋳造年代から17世紀中葉に築造されたと考えられている。一方、同じ村上第2塚群001号塚は、一辺5.6~6.9m、高さ1.5mの方形塚で、中央部の浅い窪みから素焼きの小皿10枚と数珠玉6個、銭貨222枚(寛永通宝220枚)が一括して出土している。こちらは「古寛永」が122枚で、それ以外にも、裏に「文」の字が入ったものが88枚あることから、村上供養塚よりは新しい17世紀後半に築造されたとみられる。

村上第2塚群から南方の谷津を挟んだ沖塚遺跡(50)でも、沖塚古墳とともに塚群が所在している。調査されている2基は、K2とされた隅丸方形の塚は一辺が4~5m、K3とされた不整円形の塚は直径5~7mで、いずれも高さ0.5~0.6m程度の低マウンドを呈する。封土下の旧表土上面には、焼土の分布している状況が確認された。これらの塚は出土遺物から江戸後期(19世紀代)と判断されている。

神崎川流域に所在する作山塚群(27)は5基の塚で構成され、現状保存された5号塚を除き、1~4号塚が調査されている。1号塚は楕円形状を呈し、規模は南北約8m、東西約6m、高さ約60cmで、塚封土の一部を供給したとみられる周溝状の掘り込みが検出されている。2号塚は直径約8~9m、高さ約1mの円形塚で、封土は黒褐色土と褐色土を交互に積み上げられていることがわかった。3号



第3図 周辺旧地形図



(1/50,000)

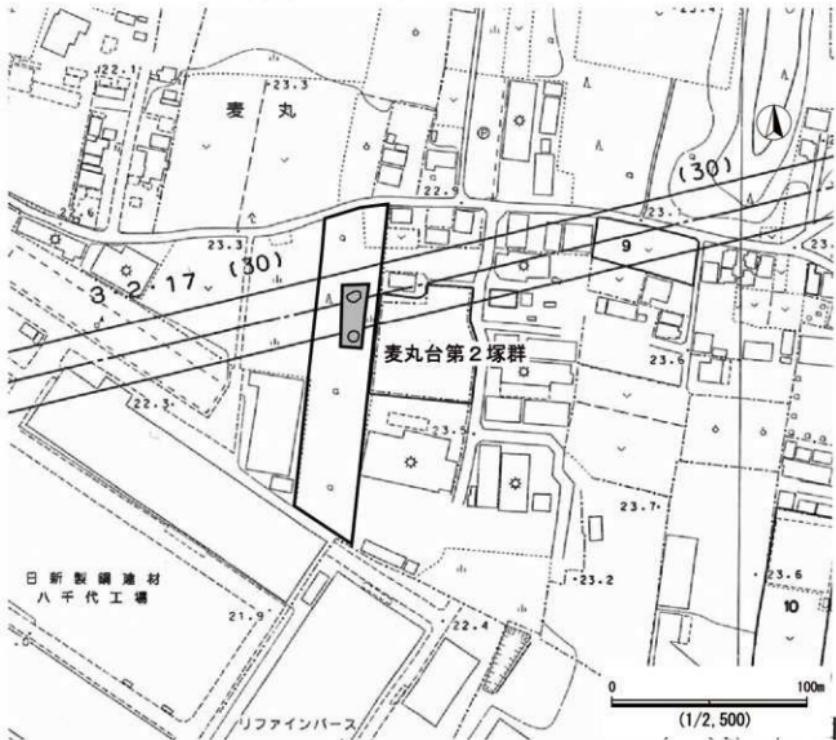
1 麦丸台第2塚群	11 宝喜作台入定塚	21 法目塚	31 稲荷山塚	41 逆水塚群
2 麦丸台塚群	12 七百余所神社塚	22 白井第5号塚	32 豊富駒込塚	42 神野新山塚群
3 金塚所在塚	13 下高野庚申塚	23 小室八幡神社塚	33 追分塚	43 神野群集塚
4 大日前塚群	14 米本塚	24 向塚	34 熊野神社群集塚	44 境堀遺跡
5 作ヶ谷津庚申塚	15 村上新山塚群	25 車方町所在塚	35 吉橋宮ノ前塚群	45 栗谷遺跡
6 尾崎群集塚	16 上高野相野庚申塚	26 小野田町所在塚	36 庚申山塚	46 間谷遺跡
7 笹塚塚群	17 正覚院塚	27 作山塚群	37 木戸前塚	47 大久保三山塚
8 向塚	18 村上第1塚群	28 神久保塚	38 宮の前塚	48 作田塚群
9 庚塚第1塚群	19 村上第2塚群	29 島田塚群	39 佐山塚群	49 青音の大塚・小塚
10 庚塚第2塚群	20 勝田台群集塚	30 豊富町所在塚	40 逆水北塚群	50 沖塚遺跡
				51 井野町の庚申塚

第4図 周辺遺跡分布図

塚の規模は、直径約8.5m、高さ約1mの円形塚で、1号塚同様に周溝が検出されている。4号塚の規模は、直径約9m、高さ約1mの円形塚で、現表土中より近世陶器が出土したことから、近世以前には構築されていたことが明らかとなった。3・4号塚は、ともに構築の状態が類似することから、近い時期に築造された可能性が指摘されている。

本地点とは同じ大和田新田地区に所在する木戸前塚(37)は、南西方向約25mの成田街道沿いに立地する。当初は円錐形状を呈する大型の塚とみられており、その後の測量調査によって一辺が13~15m、高さ3.1mの隅丸方形であることが判明した。構築技法は、塚の範囲をソフトローム面まで削平・整地し、封土は周縁部に土手状の盛土した後に水平に積み上げていることを把握した。遺物は寛永通宝2点を始め、碗を中心とした陶器や焰熔などの土器、鉄製品など江戸時代中期以降が主体で出土しており、ほぼその時期に構築されたことが判断された。塚は長らく土地所有者の信仰対象とされてきたが、築造時の目的は不明瞭である。

以上に概観したように、市内での調査事例は徐々にではあるが蓄積されつつある。しかしこれまでの調査では、年代や築造目的を確定できる石塔類や遺物が方形又は隅丸方形を呈する大型の塚からは出土しているものの、小型の円形塚については未だ乏しいのが現状である。

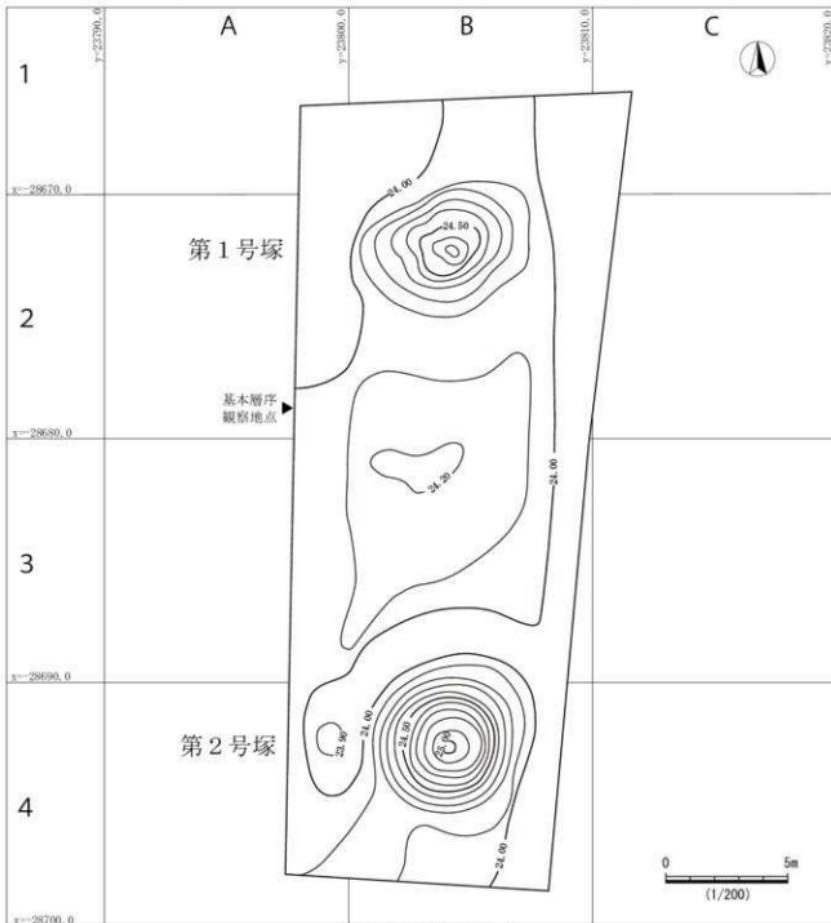


第5図 調査区域図

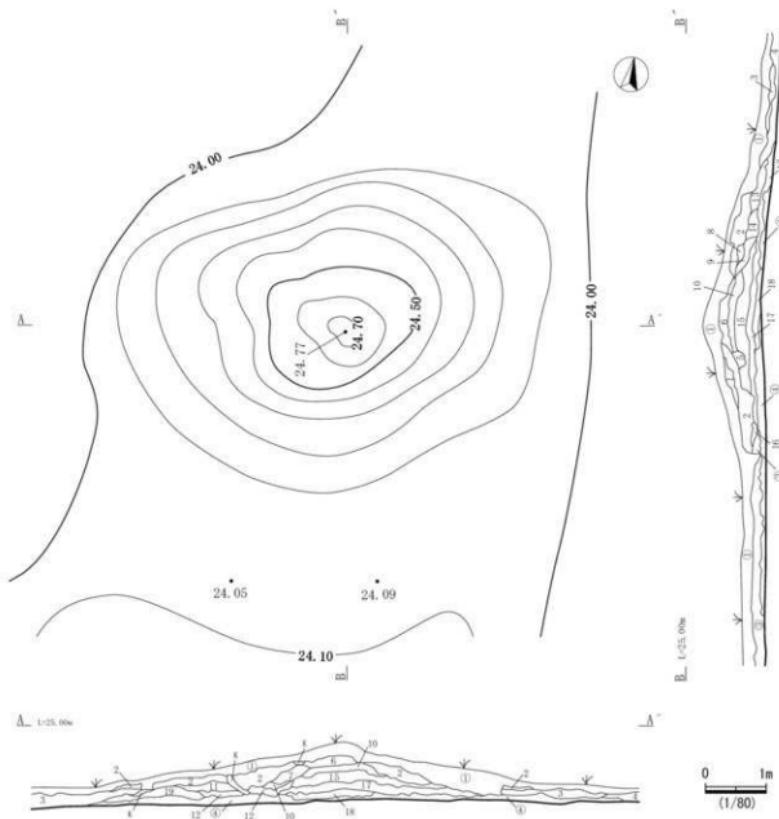
第2章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査対象範囲は、塚2基を包括した527m²の調査区である。現況から見たそれぞれの塚は、北側に位置する第1号塚の場合、形状が歪んでおり、原形を留めていないことがうかがわれた。一方、南側に位置する第2号塚は、立木が比較的多く自生していたが、マウンド状にしっかりととした封土が遺存しており、構築されたままの状態である可能性が高いと考えられた。調査区内では、封土中や封土下からの掘り込み等は認められず、最終的に検出された遺構は、現況から確認できた塚2基のみであった。遺物は縄文土器片28点、土師器1点が出土し、遺構出土遺物として次節(3)で詳細を述べた。



第6図 調査区全体図



第1号探 土層説明

- 1 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色粒多量(20%)。同色ブロック(ϕ 2 ~ 5mm) 少量含む。締まり・粘性なし。
- 2 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色粒中量含む。締まり・粘性なし。
- 3 黄褐色土 10YR4/4 ロームブロック(ϕ 2 ~ 5mm) 少量、黒色ブロック(ϕ 2 ~ 5mm) 微量含む。締まり強、粘性弱。
- 4 黄褐色土 10YR4/6 ロームブロック(ϕ 2 ~ 5mm) 中量含む。締まり有、粘性弱。
- 5 黒褐色土 10YR3/1 褐色土をブロック状に少量含む。締まり・粘性弱。
- 6 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色粒多量(20%)含む。締まり弱、粘性あり。
- 7 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に多量(20%)含む。締まり・粘性弱。
- 8 黒褐色土 10YR3/1 褐色土をブロック状に多量(20%)含む。締まり弱、粘性有。
- 9 黒褐色土 10YR3/1 褐色土をブロック状に多量(20 ~ 30%)含む。締まり弱、粘性有。
- 10 黑褐色土 10YR3/1 黄褐色粒多量(20%)。褐色土をブロック状に少量含む。締まり弱、粘性有。
- 11 黑褐色土 10YR3/2 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に多量(30 ~ 40%)含む。締まり弱、粘性有。
- 12 黑褐色土 10YR3/1 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に多量(30%)含む。締まり・粘性有。
- 13 黑褐色土 10YR3/2 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に中量含む。締まり・粘性有。
- 14 黑褐色土 10YR3/1 褐色土をブロック状に多量(20%)含む。締まり・粘性有。
- 15 黑褐色土 10YR3/2 黄褐色粒多量(20%)。褐色土をブロック状に中量含む。締まり・粘性有。
- 16 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に少量含む。締まり・粘性弱。
- 17 黑褐色土 10YR3/2 褐色土をブロック状に多量(40%)含む。締まり・粘性有。
- 18 暗褐色土 10YR3/3 褐色土をブロック状に少量含む。締まり・粘性弱。
- 19 黑褐色土 10YR2/2 褐色土をブロック状に多量(40%)含む。締まり・粘性有。

*褐色土のブロックは ϕ 10 ~ 20mm 前後を主体とする。

第7図 第1号探

- ① 基本層序①参照
- ② 基本層序②参照
- ③ 基本層序③参照
- ④ 基本層序④参照

第2節 検出された遺構と遺物

(1) 第1号塚（第7図、図版1・2・4）

構築されている位置は、調査区北側のB1・2グリッドである。形状は歪な楕円形を呈し、長軸方向はN-61°-Eを示す。規模は、長軸（北東～南西）7.06m、短軸（北西～南東）4.87m、高さ0.67mを測る。現況で塚の南側裾部を見る限りでは、ほぼ円形に整えられているものの、北西側のみ抉り取られたように大きく崩れていた。塚の頂部から裾部まではなだらかになっている。塚南側の周囲がわずかに窪んでいたものの、明瞭な周溝は検出されなかった。

封土は、ソフトロームの漸移層にあたる基本層序④層を整地し積み上げたと考えられる。ただ、最下層にあたる18層は④層を掘り込んだように見えたが、検出面では明瞭な掘り込みを確認することができなかった。この層は基本層序③層に類似することから、旧表土の一部が残存していたのかもしれないが、後述する第2号塚では逆に掘り残したような同様の層が認められることから、狭い範囲ではあるが、整地する際に叩き締めなど何らかの行為が成された可能性もある。封土は整地面上に黒褐色土（6・10・15・17層）を主体とし、やや山形に積み上げて構築されている。黒褐色土層中にはブロック状の褐色土が多量に含まれており、締まりはあるものの強度はあまり感じられない。頂部から裾部にかけての中腹には締まりの弱い黒褐色土（2層）が堆積しており、頂部付近の封土が流失した可能性が考えられる。流失したと仮定した場合、塚築造時には現況より勾配や高さを有していたことが想定される。裾部外側の土層に目を移すと、固く締まった褐色土（3・4層）が広がっていた。いずれも粒状が粗目の砂質土に近く、封土の土質とは明らかに異質である。周囲の土で封土の一部を補った際に掘り込まれた痕跡とも考えられ、塚築造後に埋め戻しや整地が行われた可能性がある。

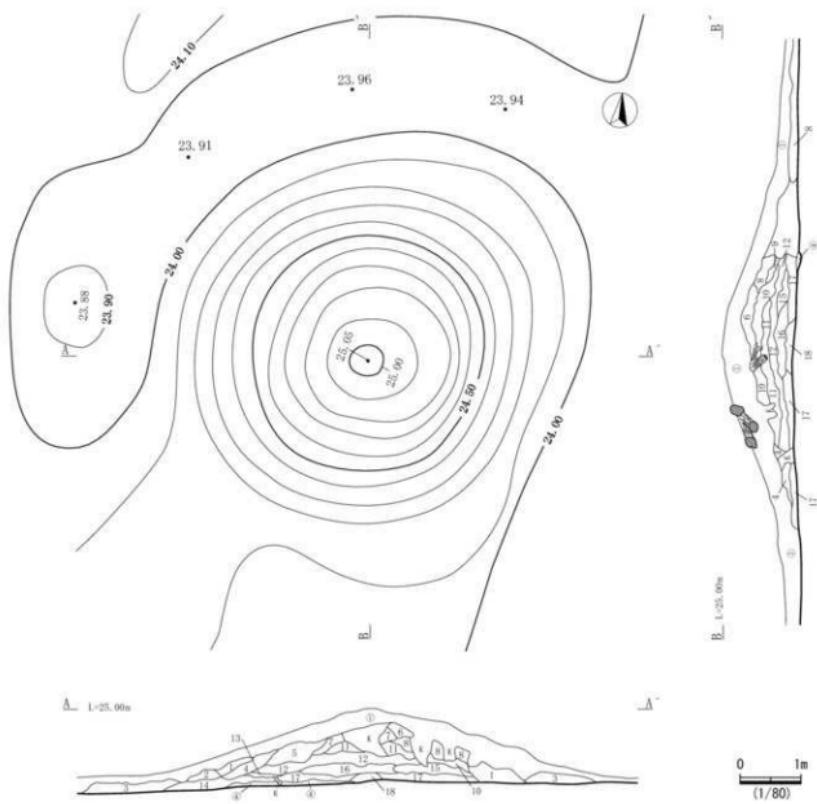
遺物は、南側裾部付近の封土中から、細片で図示できない縄文土器の胴部片1点が出土しているが、塚に直接的に関わる時期のものは出土していない。

塚の築造時期は、封土の状態から中・近世に構築されたと考えられる。

(2) 第2号塚（第8図、図版1・3・4）

構築されている位置は、調査区南側のB3・4グリッドである。形状は円形を呈し、規模は、長軸（北～南）7.26m、短軸（東～西）7.00m、高さ1.03mを測る。現況での塚の裾部は、わずかに北東側と南東側で若干の歪みが認められるが、ほぼ円形に整えられ、頂部にかけてきれいなマウンドを形成していることから、原形が保たれているものと考えられる。塚西側から北側にかけて周囲がわずかに窪んでいるものの、明瞭な周溝は検出されなかった。

塚上には、自生したとみられる立木が繁殖していたため、その根が封土中にかなり侵入し、上部の土層は良好な状態で観察することができなかった。封土は、旧表土にあたる基本層序④層を整地し積み上げたと考えられる。ただ、最下層にあたる18層は基本層序③層に類似した層が認められ、旧表土が掘り残されたままになっているのかもしれない。前述した第1号塚とは逆の行為となり、ここでも塚中央部を整地する際に何らかの行為が成された可能性がある。封土は整地面上に黒褐色土（6・10・11・12・16・17層）を主体とし、18層上で山形に積み上げて構築されている。黒褐色土層中にはブロック状の褐色土が多量に含まれており、締まりはあるものの強度はあまり感じられない。頂部から裾部にかけての中腹には流失したとみられる締まりの弱い黒褐色土（4・5層）が堆積しているが、第1号塚に比べてわずかである。裾部外側の土層に目を移すと、ここでも第1号塚と同様に固く締



第2号様 土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色粒中量含む。縮まり有、粘性弱。
- 2 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色粒少量含む。縮まり・粘性有。
- 3 にじむ黄褐色土 10YR4/3 黄褐色粒中量含む。縮まり強。粘性有。
- 4 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に多量(20%)含む。縮まり・粘性弱。
- 5 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に多量(40%)含む。縮まり・粘性弱。
- 6 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に少量含む。縮まり・粘性弱。
- 7 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色粒微量。褐色土をブロック状に多量(20%)含む。縮まり・粘性弱。
- 8 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色粒中量。褐色土をブロック状に少量含む。縮まり・粘性弱。
- 9 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に中量含む。縮まり・粘性弱。
- 10 黒褐色土 10YR3/1 褐色土をブロック状に多量(50%以上)含む。縮まり・粘性有。
- 11 黑褐色土 10YR3/1 褐色土をブロック状に多量(20%)含む。縮まり弱。粘性有。
- 12 黑褐色土 10YR3/1 褐色土をブロック状に多量(30~40%)含む。縮まり有。粘性弱。
- 13 黑褐色土 10YR2/1 黄褐色粒少量。褐色土をブロック状に多量(20%)含む。縮まり弱。粘性有。
- 14 黑褐色土 10YR2/2 褐色土をブロック状に多量(50%以上)含む。縮まり・粘性有。
- 15 黑褐色土 10YR3/2 褐色土をブロック状に多量(50%以上)含む。縮まり・粘性有。
- 16 黑褐色土 10YR2/2 褐色土をブロック状に多量(40%以上)含む。縮まり・粘性有。
- 17 黑褐色土 10YR3/2 褐色土をブロック状に多量(50%以上)含む。縮まり・粘性有。
- 18 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒少量含む。縮まり・粘性有。

半褐色土ブロックはφ 10~20mm 前後を主体とする。

① 基本剖面①参照
④ 基本剖面④参照

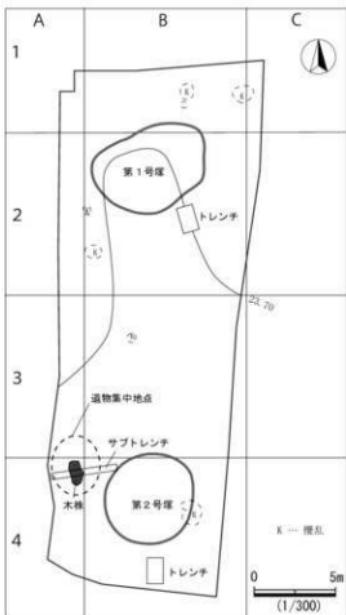
第8図 第2号様

またにぶい黄褐色土（3層）が認められた。やはり粒状が粗目の封土とは異質の砂質土状で、第1号塚と同様に塚築造後に人为的に搬入されたのではないかと考えられる。こちらも周囲の土で封土の一部を補うために掘り込まれた痕跡とも考えられ、塚築造後に埋め戻しや整地が行われた可能性がある。塚に直接的に関わる遺物は出土していない。

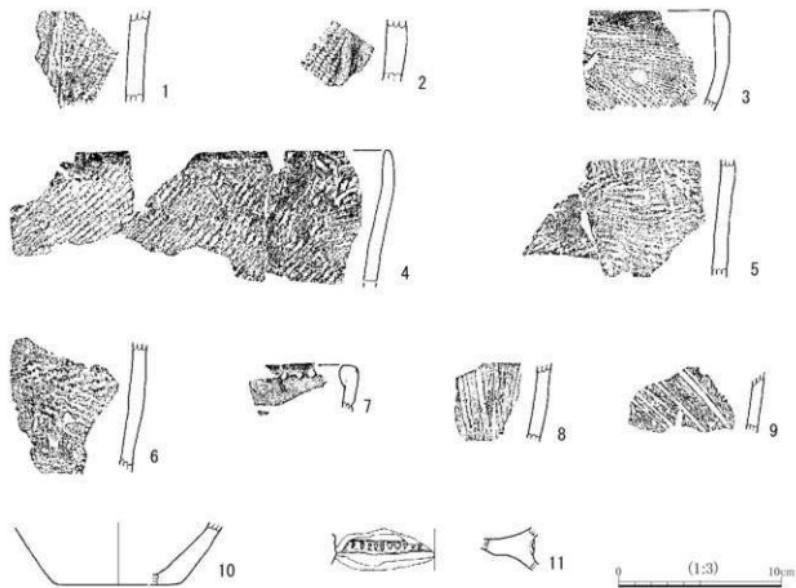
塚の築造時期は、封土の状態から中・近世に構築されたと考えられる。

(3) 遺構外出土遺物（第10図、第1表、図版4）

今回の調査で出土した遺物は、総点数で29点であった。種類別の内訳は、図示できなかった土師器1点以外は全て縄文土器で占められ、その内13点は第10図4～6を含む同一破片と考えられる。遺物の出土地点は、塚の封土中又は攪乱中から出土した2点を除き、全て調査区内からの表探遺物である。特に前述した4～6とその同一破片は、B4グリッド杭南西側脇にある木株の下を中心にその周辺から集中して出土していた。念のためその木株を通してサブレンチを入れてみたが、遺構は検出されなかった。それ以外の遺物もA3・4、B3・4グリッドの遺構検出面上から出土していることから、調査区南側での偏在傾向がうかがわれる。縄文土器の時期は、中期後半に位置づけられる加曾利EⅢ式期の土器片1・2が最古である。単節RL縄文を縱又は斜め回転で施し、後述する後期の土器群より器壁が厚いことが特徴である。後期前半段階の堀之内1式でも新相とみられる4～6は、口縁部から胴部中位あたりまで無節L縄文を横回転で施し、中位以下は斜め回転など多方向から施文していることから羽状構成などの文様を意識しているのかもしれない。内面は非常に丁寧なミガキによって調整されており、口縁部から胴の上部付近は横方向、一方胴部中位から下部の破片は縦方向に施されているものが主体であった。後期後半段階の加曾利B式～安行式期に比定されるものとしては7～10の破片が認められ、いずれも粗製土器である。7の口縁部片は、外端にキザミが入り、次の8・9よりは新しい。8・9の胴部片は、ともに先端丸棒状工具とみられる施文具で斜め方向又は縦方向の条線文が施されているが、8は地文が無文であるのに対し、9は地文に縄文が施文されていることから、類似した破片ではあるものの時期差がうかがわれる。10の無文底部片は、基本層序②層中からの出土で、基本層序観察地点で出土した。底径の小さな形態から安行1～2式期の底部片と思われる。11は摩耗が顕著な破片であるが、鉢部の底部内面と台部の内面双方が確認できることから、台付鉢脚部の破片と考えられる。鉢と台部との接合部分が刻文帯で装飾されており、晩期前葉の所産であろう。



第9図 塚除去後調査区



第10図 遺構出土遺物

第1表 出土遺物観察表

遺構番号	種類 部機	口径 器高 底厚	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調 (外面/内面)	焼成	備考
1	縦文土器 深鉢	(5.6) —	脚部片。微隆線で区画し、区画内を滑り消し。地文は縦回転の単路RL縞文。内面はミガキ。	長石。石英微、砂粒多、白色針状物	にぶい褐色7.5VR5/3: にぶい褐色7.5VR5/4	普通	加曾利EⅢ式
2	縦文土器 深鉢	(3.8)	脚部片。微隆線で区画し、区画内を滑り消し。地文は斜め回転の単路RL縞文。内面荒れ調節不鮮明。	長石。砂粒多、白色針状物	明赤褐色5R5/6: にぶい褐色7.5VR5/4	普通	加曾利EⅢ式
3	縦文土器 鉢	(6.1)	口縁部～脚部片。全体に無筋L縞文を横回転施文。口縁部は横方向に施文。欠損し不明確であるが小成状を呈する可能性あり。	長石微、石英微、白色粒、砂粒多、白色針状物	にぶい褐色7.5VR5/4: 黒褐色7.5VR3/1	普通	中期
4	縦文土器 深鉢	(8.0) (8.0)	口縁部～脚部片。全体に無筋L縞文を横回転施文。口縁部は石英微、透明粒、砂粒、白色針状物	明赤褐色5R5/6: にぶい赤褐色5YR5/4	良好	埴之内1式 4-5と同一個体	
5	縦文土器 深鉢	(7.2)	脚部片。無筋L縞文を上部は横回転、下部は斜回転で羽状を構成か、結節回転文が一部認められる。内面は縦方向の丁寧なミガキ。	砂粒、透明粒、白色針状物	にぶい赤褐色5YR5/4: にぶい赤褐色5YR5/4	良好	埴之内1式 4-6と同一個体
6	縦文土器 深鉢	(7.9)	脚部片。無筋L縞文を上部は横回転、下部は斜回転で羽状を構成か、内面は縦方向のミガキ。	砂粒、透明粒、白色針状物	にぶい赤褐色5YR5/4: にぶい赤褐色5YR5/4	良好	埴之内1式 4-5と同一個体
7	縦文土器 深鉢	(2.8)	口縁部片。沈澱区画の無文帯。内面に折り返して肥厚させ、外端にキサギを加える。	砂粒、透明粒、白色針状物	にぶい褐色7.5VR5/4: 赤褐色5YR4/6	良好	加曾利B3式 又は曾谷式粗製土器
8	縦文土器 深鉢	(1.8) —	脚部片。先端丸棒状工具により縦～斜方向の条線文を施す。	角閃石・輝石類、白色粒	にぶい赤褐色5YR4/3: にぶい赤褐色5YR5/4	良好	加曾利B2式 又はB3式粗製土器
9	縦文土器 深鉢	(3.7) —	脚部片。地文に単路RL縞文を施文。先端丸棒工具により斜方向の条線文を施す。	角閃石・輝石類、白色粒	にぶい赤褐色5YR4/3: 赤褐色5YR4/6	良好	加曾利B2式 又はB3式粗製土器
10	縦文土器 深鉢	(3.8) (8.0)	底部片。無文。内外面ともに摩耗顯著で調整不鮮明。	角閃石多、赤褐色粒、白色粒、透明粒	赤褐色2.5VR4/6: 明赤褐色2.5YR5/6	普通	安行I式又は2式粗製土器
11	縦文土器 台付鉢	(2.6)	脚部片。接合部分に刻文帯を巡らせる。摩耗顯著。	角閃石多、赤褐色粒、白色粒、透明粒	にぶい褐色7.5YR6/4: 闇灰10VR4/1	普通	晚原前葉

第3章　まとめ

麦丸台第2塚群の2基の塚は、今回の調査によってそれぞれの共通点を捉えることができた。形状はともに円形とみられ、規模では第1号塚が原形を留めていない可能性はあるものの、径は7m程度である。封土はいずれも褐色土ブロックを多く含んだ黒褐色土を主体にして山形に積み上げられており、強度も同程度である。埋葬施設や周溝は認められない。そして両塚は南北方向に並列して規則性がうかがわることから、ほぼ同時期に築造された可能性が高い。

過去のデータによれば、県内で確認されている塚は、円形の塚が径5～6mの小型ものを中心にしてまとまっている傾向が把握されている。一方、方形の塚は大小様々な規模のものが認められるが、11mを超えるものはほとんどが方形で、周溝を伴う塚も一部存在することが知られている（千葉県文化財センター 1994）。そして小型の構築には少量の土で造ることが可能であるため、周囲の土を集め盛ってあることから、単純で崩れやすくなっていると考えられている。本地点の塚に当てはめてみると、県内の円形塚に見られる傾向に近い状態を把握することができた。このような傾向は、市内の事例（第1章第4節）を概観して見た場合でも同様である。そして方形塚に銭貨などの年代を推測できる資料が多く出土している一方で、円形塚には年代や性格を明確にできる資料が乏しいようである。

塚の築造された年代と目的について言及したいところではあるが、今回の調査でも関連する遺物が出土しなかったため明確にし得ない。年代については類例を求めるところ、市内では塚による発掘調査事例は少なくないものの、出土遺物から年代が想定されているもので比較可能な類似した塚（境堀遺跡3号塚、作山塚群4号塚等）を参照するならば、近世とするのが無難であろう。

目的について考えてみると、塚とは本来は土を盛り上げた墓を意味したが、中・近世になって多様な目的をもって構築されるようになったと理解されている（橋本 2001）。「富士塚」「御岳塚」「三山塚」「庚申塚」「梵天塚」「供養塚」「上人塚」「狐塚」など信仰する対象によって様々な名称が付けられた、墓に限定しない宗教的行為の対象として構築されたものと、「一里塚」「三里塚」「境塚」などの標識として構築されたものとに大別される。後者の場合は、本来信仰目的で造られた塚が、その意味を失って、標識として利用されるようになった場合もあると考えられている。

最後に以上のことを参考にして、本地点の塚が何を目的として築造されたか、市内における調査事例や周囲の状況から推測してまとめとしたい。本地点の塚群では、宗教的行為については石造物など信仰対象にした遺物又は痕跡は確認されなかった。さらに市内調査事例で尾崎群集塚01号塚や追分塚のような焼土跡、焼土の混入といった塚築造に関わる行為が一概には言及できないが、このような焼土の痕跡が宗教的な行為のひとつとするならば、本地点の塚に限ってみた場合、信仰を目的とした意識は希薄のようである。一方で、周辺との立地から見ると、塚の北側を通る道は迅速図（第3図）でも確認できる当時の道路であり、旧麦丸村から吉橋村へ至る村道となっている。これに直交して構築されていることは、信仰的というよりは標識としての境界、もしくは一里塚のような標識としての意味合いが強いように思われる。

このように見えてくると、本地点の塚に対しては未だ理解されないことが多い。また、近接する金塚所在塚や尾崎群集塚などの周辺に点在する塚・塚群との関連性も気にかかるところである。それらを含め今後も多方面からの検討を重ねていく必要があるだろう。

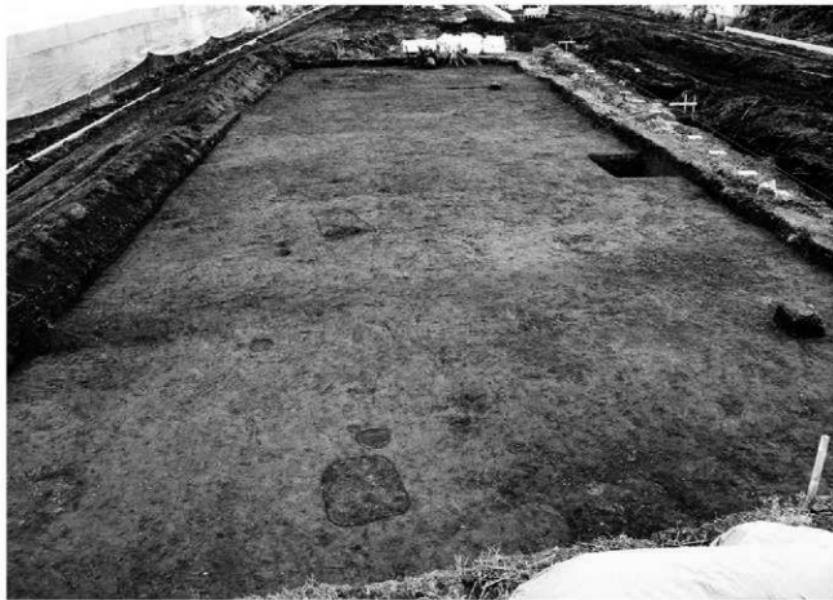
【参考・引用文献】

- 朝比奈竹男 2002「金塚所在塚」「尾崎郡集塚」「不特定遺跡発掘調査報告書1」八千代市教育委員会
- 千葉県文化財センター 1994『房總考古学ライブリー8 歴史時代（2）』
- 常松成人・中野修秀 2007『浅間内道路・白筋道路・沖塚道路－八千代市辻田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』八千代市辻田前土地区画整理組合・八千代市遺跡調査会
- 常松成人 2011a『木戸前塚－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』鈴木美登・八千代市教育委員会
- 2011b『作山塚群1号塚・2号塚－駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 株式会社ケイユー・八千代市教育委員会
- 橋口定志 2001「墳－6 祭祀遺跡と塚」『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編 柏書房
- 宮澤久史・朝比奈竹男 2004『栗谷道路・役山東道路・雷南道路・雷道路－（仮）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書I－第3分冊』大成建設株式会社・八千代市道路調査会
- 宮澤久史 2005『境堀道路－（仮）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書IV－』大成建設株式会社・八千代市道路調査会
- 宮下恵史 2017『作山塚群3号塚・4号塚－福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』社会福祉法人心聖会・八千代市教育委員会
- 武藤健一 1995『追分塚発掘調査報告書』八千代市追分塚調査会
- 八千代市歴史民俗資料館 1998『埋めて願う～銭・壺・経筒～』企画展図録
- 八千代市史編さん委員会 1991『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』八千代市
1998『八千代市の歴史 資料編 自然Ⅱ』八千代市

写 真 図 版



第1・2号塚現況（手前が1号塚・北から）



調査区全景（北から）

図版2



第1号塚現況（東から）



第1号塚西側土層断面（南から）



第1号塚東側土層断面（南から）



第1号塚南側土層断面（東から）



第1号塚北側土層断面（東から）



第2号塚現況（東から）



第2号塚西側土層断面（南から）



第2号塚東側土層断面（南から）

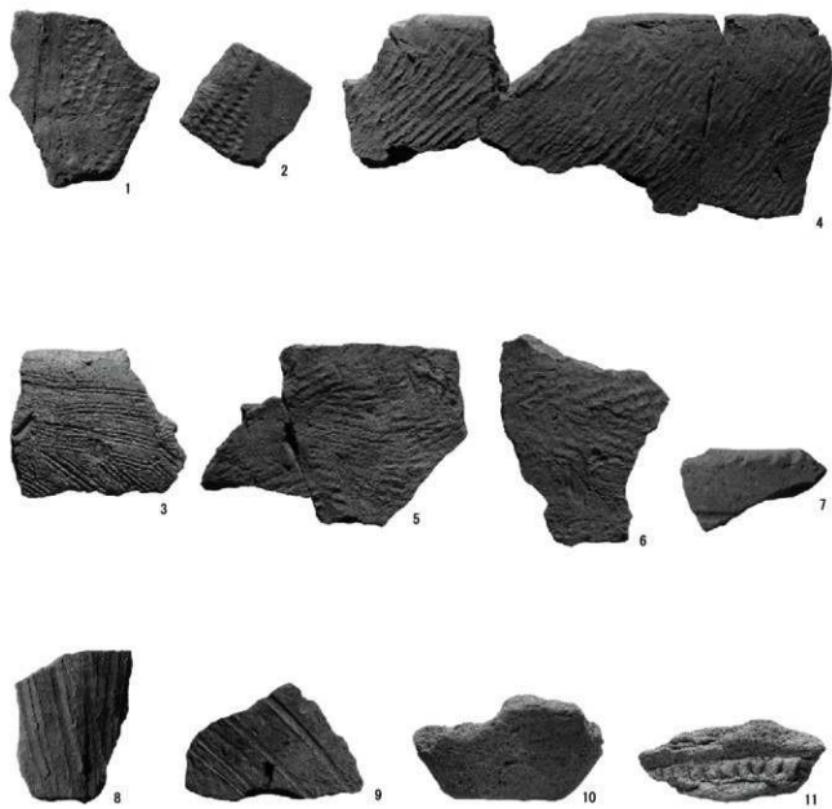


第2号塚南側土層断面（東から）



第2号塚北側土層断面（東から）

図版 4



遺構外出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	むぎまるだいだいにつかぐん はくつちょうさほうこくしょ							
書名	麦丸台第2塚群発掘調査報告書							
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財調査							
編著者名	高野浩之 八千代市教育委員会							
編集機関	株式会社 地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森 2596-9							
発行機関	日新ホーム株式会社／八千代市教育委員会／株式会社地域文化財研究所							
発行年月日	2019(令和元)年 10月 15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
麦丸台 第2塚群	千葉県八千代市 大和田新田字 麦丸台668番	市町村	遺跡番号	35° 44' 28"	140° 05' 47"	2019.07.08 ～ 2019.07.19	527 m ²	宅地造成

千葉県八千代市
麦丸台第2塚群発掘調査報告書
-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

令和元(2019)年10月15日 発行

編集 株式会社 地域文化財研究所
日新ホール株式会社
発行 八千代市教育委員会
株式会社 地域文化財研究所

印刷 株式会社 正文社
〒260-0001 千葉市中央区都町1-10-6
TEL 043-233-2235
